

都合を生ずるおどおど、實際右方を上位として、命せし所もありしといふ、之に由りて考ふれば、若しも算盤をして、東洋獨創のものたらしめば、其の位を命ずるにも、右を上位とすべきは、古來の習慣上、當然の事たるべきを、信すればあり。而して實際、其然らざるを見れば、其の起源を西洋よ、發せしものにはあらざるか。吾人が本篇を草する、主として、希臘數學歴史に據り、他に一二の參考に供せしもの、ありしといへども、不幸にして、東洋に關する材料を得ず、疑を決するに由なし。暫く記して、高教を讀はんとす。

吾人自ら量らず、蟻螂の斧を以て、敢て龍車に向ふ、誰か其の愚を笑はざらん。しかも忍びて、これをあす、希くば、諸子の憫みを買ふを得ん。一葉の微も、時としては、全林の木を察すべく、一滴の微も、時としては、全河の流を知るべしと。果して然らば、此篇、只其の一斑に過ぎずといへども、或は全豹を窺ふの、一助たるやも知るべからず。

(完)

文苑

季札か劍を墓樹に掛けし話

助教授 合紫樓主人

この話、諸書にみゆれども、史記を以ては、いたく事情に潤ぎかるやうに覺ゆれば、今は新序に據りて譯しつ。

昔吳の季札といひし人、使命を承はりて、上國よいにけり。道にて、徐の君が許を訪ひけり。徐の君、予のはける劍をみて、ほしく思ひ給へども、口に之出ざりけるを季札

れど知りつれども、今は君の使あれば、力あし、歸りこむ時にど、心に念じて、たち去りぬ。さて歸さに、徐に至れば、子の君既に身まかり給ひきと云ふ。季札いたく悲みて、子の劔を献らむといひりれば、供の者、徐の君は、既にこの世に亡きものをといふ。季札いふ、先きにおのか心に許しけるを、死をもて、違へあむや、とて、世子か許に贈りけるに、御志は、辱なくこそ候へ、されども、我が父も、さる詞のあかりしを、賜はるへきことかは、ど強ひて與へられども、受けず。さらば、せんなしとて、即ち徐君の墓をどひゆきて、劔を松の枝にかけて去りにければ、徐の人、

季子はやちもとの契を忘らずて、冢つかのたち樹に劔たちかけましき

と詠みて、いと、子の義に感じけるとぞ。季札は、吳の君壽夢が第四子にして、延陵といふ所に封せられければ、世に延陵季子といふ。兄弟のうち、尤賢かりしかば、世を嗣がせむと、父の君の申されまかども、聽かさりければ、長子は諸樊といふを立て、さて季子に國政を攝あつからまめき、といひ傳へけり。

花下酌酒

縁

堂

長閑ある春のこゝろに浮出つる花のさかつき盡せさりけり

所々花盛

内も外も春の最中にありぬれば掃ふも花の塵にそありける